

「愛国主義はエゴイズムだ」

トルストイや北澤博史さんのことなど、思いつくまま

大類 善啓

ろくな番組はないと思っているテレビだが、その中でNHKの教育テレビはなかなかいい番組をやる。つい最近も、ロシアの文豪トルストイの日露戦争当時の発言を特集した番組があり、実に見応えがあり最後まで見てしまった。

「汝、悔い改めよ」

トルストイは、敬虔な仏教徒の国日本と、キリスト教の国である祖国ロシアがなぜ殺し合いをするのかと問う。両国に「汝、悔い改めよ。直ちに戦争を止めなさい」とメッセージを発していたのだ。ドストエフスキーに惹かれた者からすると、トルストイは白樺派の人たちが共感していたこともあってか、なんだか「甘い」ような感じがして『戦争と平和』も途中で放り投げていた。

1960年代の半ば、埴谷雄高云うところの「マルクス主義的アナキズム」と、吉本隆明の政治思想の狭間に何かしら自分のいる場所があるかのように思っていた者にとって、番組の中でも紹介されていたが、トルストイを批判するレーニンの方に、当時は親近感を寄せていた。

トルストイは、殺し合いをやって誰が喜ぶのか、殺し合いをしてどれだけの人々が悲しむだろう、と非戦を進言する手紙を日本やロシアをはじめ世界に発信する。日本の「平民新聞」を主宰する幸徳秋水などもトルストイに共鳴する。しかし、両国とも愛国主義の風潮に押されて戦争をする。

秋水は云う、「自分を愛して他人を憎む、同郷人を愛して他郷人を憎む。それが本当の愛か。自国のために他国を侵すのが<愛国心>ならば、それは野獣的天性、迷信、狂熱、虚誇、好戦の心」だ。(早野透氏執筆、朝日新聞<<ニッポン人・脈・記、神と国家の間⑧>>「愛国心の跋扈は許さじ」(本誌65頁参照されよ)

日露戦争から第一次大戦へ。レーニンは「帝国主義戦争を内乱に転化せよ」と訴え、トロツキーと共にロシア革命を成功に導いた。そのロシア革命もスターリンによって歪められ、「革命は裏切られた」(トロツキー)。今後は、ソ連解体もあって、ますますレーニンよりもトルストイの思想の方に普遍性が出てくるのではないだろうか。番組は、そのトルストイが、「愛国主義はエゴイズムだ」と語ったことを紹介していた。

「愛国主義はエゴイズムである」。まさにそうだ。そう喝破したトルストイの言葉を遅まきながら聞き、トルストイにいたく共感を覚えるのだ。

春節を祝う会と北澤博史さんのこと

方正の会でここ2年ほど司会もやってくれている旧友の森一彦は、寄稿した文章にあるように、「見えなかった者たち」という視点を提供している。(31頁)

普通だとなかなか「見えなかった人々」が大勢いらっしやるのだ。改めてそう思ったのは、奥村正雄さんに誘われ、千葉での帰国者の春節を祝う会に出て多くの「残留婦人や残留孤児」だった人たち、そしてその方々を支援する人たちが集まっているのを見たからだ。実は、「見えなかった人々」ではなく、「見ようとしないう人」がまた多いのかもしれない。

1953年、18歳の時、中国から引揚げてきた北澤博史さんは帰国後、ある有名ホテルに勤務するホテルマンだった。私の記憶の間違いがなければ、北澤さんはその勤めている間、周囲の人たちに、中国から引揚げてきたことを決して話さなかったという。北澤さんも「見えなかった人」のひとりだったのではないかと。そんな思いがする。

その北澤さんが亡くなられた。2月、高良真木さんからお電話をいただき、訃報を知った。北澤さんがどういうきっかけで、方正の会と繋がったのかは正確には思い出せない。しかし総会にも顔を出していただいたし、2度ほどお会いしたいと言って事務所に来られたことがある。

巻末の本の紹介頁に何度か、ご著書『二つの祖国—ある中国残留孤児の証言』を紹介したことがある。北澤さんは、1935年（昭和10年）に、長野県上伊那郡赤穂村で生まれ、1940年5月両親に連れられて、満州信濃村に入植された。日



中国語勉強会の仲間と、右端北澤さん本の敗戦は容赦なく北澤さんの運命を翻弄し、孤児になってしまった。

『二つの祖国』の中で沢木正一という名前で表現されている主人公は、言葉に尽くせないほど惨めで非道、怒りの感情を味わう。が、そんな感情を抑制するかのよう、北澤さんは淡々と描いている。

追悼の文章を書いていた高良真木さんが言うように、たくさんのスケッチ画も凄惨がない。誤解を恐れずにいえば、どこことなくユーモアがにじみ出てくるような雰囲気だ。

北澤さんは自分が体験したことを、後の世代の人たちにどうしても伝えておかなければいけないという強い思いがあった。仕事を終えた後、自宅で少しずつ文章を書いていた。廣子夫人は何を書いているのかは知らなかったが、その姿を記憶されている。そうして定年退職して6年後、『二つの祖国』を自費出版された。お金はかかったが、夫人は家族を養ってくれた北澤さんの思いを実現するために温かく見守った。

今手元に『二つの祖国』が何部かある。どうぞ会のために自由に使ってほしい、売れてもお金は、会の方で使ってほしいと言われていた。

160頁ほどの小さい本である。お読みになりたい方は、ご一報いただければお送りする。北澤さんには08年5月発行の「星火方正」6号に寄稿していただいた。その文章「身も心も丸裸」を、北澤さんを偲んで掲載する。北澤博史さん、安らかに。再見。

(おおい・よしひろ：方正友好交流の会 事務局長)